

令和四年度新宿区夏目漱石コンクール わたしの漱石、わたしの一行

高校生の部 最優秀賞

二人が共有した心持

光塩女子学院高等科 2年 大隅 咲喜

作品名『硝子戸の中』

選んだ一行

どうして私の悪口を自分で肯定するようなこの挨拶が、それ程自然に、それ程雑

作なく、それ程拘泥わずに、するすると私の咽喉を滑り越したものでしょうか。

私はその時透明な好い心持がした。

私たち読者は、作者の人柄をその作品を通して推断する。私は何作か漱石の作品を読んでしたが、特に『こころ』の印象が強かったのだろうか、漱石に対して厭世的な作家、という印象を持っていた。そんな漱石の印象を、私の中で大回転させたのがこの一文である。

『硝子戸の中』を読んでいくにつれ、漱石の虚偽や下心を嫌悪し、ありのままの心に接した時に充足を得る、という潔癖すぎる一面が明らかになっていった。そんな漱石の畏友太田達人は、その漱石をして「敬愛に価する長者（ちょうしゃ）」と言わしめるほどの素晴らしい人格者であったという。

私が選んだのはそんな旧き友と、漱石との再会の場面での一文だ。漱石が普段客を迎える時と同じように達人を迎えるべく座敷へ行き端座していると、後からやってきた達人は開口一番、「いやに澄ましているな」と、からかいの言葉を漱石へ投げかける。旧交を温めるのにこれほど相応しくない言葉はそうないだろう。「久しいな」でも「元氣か」でもない。からかいが混ざった言葉だ。それに対して漱石は、彼の言葉が終わらないうちに「うん」という返事を口にする。私はこの箇所には微かな違和感を覚えた。しかし漱石の性格を考えると、ただ旧友との再会が嬉しくて、というだけで素直に達人のからかいを肯ったとは思えない。この短いからかいには達人の、畏まる必要のある関係ではないだろう、という漱石への語りかけが含まれているのではないだろうか。きちんと迎えてくれるのは嬉しいが、作家と客の関係ではなかった、あの頃の関係が心地良いと私は思っているのだよ、と。そして、漱石はその思いを正確に理解したのだ。

旧友との久しぶりの再会は、如何に神経が太い人でも緊張するし、変な見栄を張ってしまうこともある。時が奪い去った過去の片鱗を相手の中に見出そうと必死になるあまりぎこちない雰囲気になることもあるだろう。しかし、達人はそんな時の力による関係の歪みから生じる緊張や見栄を「からかう」ことで取り去り、漱石もまた素直な「うん」という返事の形で達人に答えてみせたのではないだろうか。漱石は、達人のその意を汲み取った瞬間、柵しがらみも夾雑物もなかった、ただひたすらに純粹な青春時代へ戻ったような「透明な心持」を味わったに違いない。

人は時の前では圧倒的に無力だ。時は私たちを癒し、また或時は残酷に大切な物を奪っていく。愛犬との別離や変化していく早稲田の街並み、それらを経験し目の当たりにしていた漱石だからこそ、時の強大さが身に染みていたに違いない。そんな中時を軽々と超えてきた友人の姿はどれ程漱石の心に安寧を齎（もたら）したことだろう。北の大地へと株立つ友への想いには、別れへのほろ苦さと、達人なら大丈夫という、漱石の自信があったと思う。なぜなら漱石と達人はかけがえのない青春時代と「透明な心持」を共有した仲なのだから。